博士学位論文審査要旨

２０１６年2月5日

論 文 題 目：　西鶴浮世草子の文章に関する数量的研究
　　－遺稿集を中心とした著者の検討－
学位申請者：　上阪　彩香
審 査 委 員：
　主　査：　文化情報学研究科　教授　村上　征勝
　副　査：　文化情報学研究科　教授　金　　明哲
　副　査：　国文学研究資料館研究部　准教授　相田　満

要　　旨：

江戸時代の浮世草子作者である井原西鶴の作品は、わが国の文学史における重要性から、記述内容・文意の検討、成立に関する歴史的事実の考証が続けられてきたが、解明すべき重要な課題として、西鶴没後に弟子の北条団水によって編集、出版された遺稿集 5 作品『西鶴置土産』『西鶴織留』『西鶴俗つれづれ』『万の文反古』『西鶴名残の友』の著者に関する疑問が残されている。

本論文は文章における単語の出現率、品詞の構成比、品詞別単語の出現率、助詞の bigram の出現率などの文章における客観的に計量可能な項目を、主成分分析を中心とした統計手法で詳細に分析することによって、遺稿集 5 作品の著者問題について文章の数量分析の観点から解明を試みたものである。まず、西鶴浮世草子に加え、西鶴作とされる役者評判記、浄瑠璃、地誌の利用を検討したが、浮世草子とそれ以外の作品は異なった文章の特徴を持つということが明らかになったため、遺稿集の著者の検討には、浮世草子のみを用いることとした。文章分析の有効性を作品単位、巻単位、章単位で詳細に検討したが、章単位での分析は文章量が少なくなるため分析結果の信頼性が保証できないことが分かったため、作品単位、巻単位で検討することとした。西鶴浮世草子 24 作品（545,677 語）計 127 巻と団水浮世草子 3 作品（53,838 語）計 16 巻の文章の特徴を詳細に検討した結果、遺稿集 5 作品の中でも、書簡体形式の影響を受けていることが明らかとなった『万の文反古』はさらなる検討が必要であるが、残りの 4 作品は西鶴によって執筆された可能性が高いことを明らかにし、西鶴、団水の作品研究に計量的観点からの新たな知見を与えるという意味で有意義な研究と考えられる。よって、本論文は、博士（文化情報学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１６年2月５日

論 文 題 目： 西鶴浮世草子の文章に関する数量的研究
－遺稿集を中心とした著者の検討－
学位申請者： 上阪 彩香
審 査 委 員：
主 査： 文化情報学研究科 教授 村上 征勝
副 査： 文化情報学研究科 教授 金 明哲
副 査： 国文学研究資料館研究部 准教授 相田 満

要 旨：

上阪氏の学位申請に関し、2016年1月22日（金）13時より公聴会を開催し、申請者による1時間の発表、その後、14時から公開質疑応答、14時30分から1時間の非公開の口頭試問および判定の審査会を行った。質疑、口頭試問においては国文学の観点から相田委員が、計量文献学的手法の観点から浦部委員、金委員、矢野委員、村上委員が主に行った。申請者は研究内容及び関連する質問に対し的確に対応したことで、委員会は申請者が博士を取得するに足す十分な学識があることを確認した。

語学に関しては、文化情報学研究科の定める語学講義（英語）に合格している。

また申請者は、2015年に英文誌 Digital Scholarship in the Humanities に掲載された論文 Verifying the authorship of Saikaku Ihara's work in early modern Japanese literature; a quantitative approach のほか、和文誌に2篇の論文、1篇の研究速報があり、オーストラリアで開催された Digital Humanities2015 での A Quantitative Analysis for the Authorship of Saikaku's Posthumous Works Compared with Dansui's works をはじめとして国際学会での発表を計6回（米国、中国、スイス、オーストラリア、日本）、さらに国内での学会発表は16回を数える。

以上のことから、申請者の専門分野における学識、研究能力及び語学力は十分有していると判断し、よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 西鶴浮世草子の文章に関する数量的研究
—遺稿集を中心とした著者の検討—

氏　　名： 上阪　彩香

要　　旨：

本研究は，江戸時代前期の俳諧師・浮世草子作者である井原西鶴（1642？～1693）の浮世草子の著者に関する疑問，特に西鶴の没後に出版された遺稿集5作品『西鶴置土産』『西鶴織留』『西鶴俗つれづれ』『万の文反古』『西鶴名残の友』の著者に関する疑問の解明を文章の数量的特徴の分析から試みたものである．

西鶴の遺稿集は，西鶴が生前に執筆したとされる未発表の草稿を，元禄6年（1693）から元禄12年（1699）にかけて，西鶴の弟子の北条団水（1663～1711）らが編集し，出版したものである．西鶴の没後，出版されていることから，偽作・補作などの疑問が出されている．

本研究では，品詞の構成比，単語の出現率，品詞別単語の出現率，bigram の出現率を分析項目として採り上げ，計量文献学の手法を用いて下記の流れで検討を行った．

(1) 分析に用いる作品についての検討
(2) 西鶴浮世草子24作品の作品単位，巻単位，章単位での文章の検討
(3) 西鶴浮世草子の助作者として名が挙げられることの多い北条団水の文章と西鶴の文章との比較分析
(4) 遺稿集5作品の文章と西鶴の文章，団水の文章との比較分析
(5) 西鶴の書簡，西鶴浮世草子，団水浮世草子，『万の文反古』の文章との比較分析

論文は7章よりなる．第1章では本研究の目的及び著者問題が生じる背景，第2章では西鶴浮世草子の著者問題に関する先行研究，第3章では計量文献学の先行研究を紹介し，第4章では本研究で分析に用いる作品，分析データ，分析方法を示した．本論文の中心である西鶴浮世草子の数量分析については，第5章と第6章で詳細な検討を行った．

第5章1節では，分析に用いるべき作品について検討した．西鶴は浮世草子24作品の他に散文で書かれた役者評判記『難波の貌は伊勢の白粉』，浄瑠璃『暦』『凱陣八島』，地誌『一目玉鉾』の4作品を残している．これらの作品は西鶴作であることが明確であるため，西鶴浮世草子の文章の研究に，4作品の利用をまず検討した．しかし，この4作品は西鶴浮世草子とは異なった文章の特徴を持つということが分析でわかったため，遺稿集を中心とした西鶴浮世草子の著者の検討には，浮世草子のみを用いることとした．

第5章2節では，西鶴の浮世草子24作品のみを用い，作品を分析単位として遺稿集5作品の位置づけについて検討した．その結果，遺稿集5作品のなかでも『万の文反古』は，他の西鶴浮世草子とは異なった文章の特徴を持つという分析結果を得た．

西鶴の浮世草子は，一般的に章単位の短編の集まりであるとされ，西鶴作か否かといった著者同定に関して，先行研究では章単位で議論されることが多くあるため，研究を進めるにあたり，第5章3節では，巻単位，章単位での文章分析の有効性について検討した．巻単位での検討では，主成分分析の結果の作品の散布図において，同じ作品の巻は作品ごとにまとまりをもって位置することから，巻単位での有効性が明らかになった．またトピック（物語の内容）の観点からも検討を加え，武家物と町人物の作品の巻は，トピックごとにまとまって位置するという結果を得た．このことから，内容の近接する作品の文章の特徴は，類似した傾向にあるということが明らかになった．そのため，第6章で用いる団水データベースを作成する際に，団水浮世草子のなかから好色物『色道大鼓』，武家物『武道張合大鑑』，町人物『昼夜用心記』を選択した．

章単位での分析結果は，分析項目によっては作品内の章がある程度のまとまりをもって位置する場合もあるが，多くの場合，文章の長さが短いことから，巻を単位とした分析結果に比べて作品内でのばらつき

が大きく，章を単位としての分析は難しいということが明らかとなった．

第6章1節では，西鶴浮世草子の著者の検討のため，遺稿集5作品の編者で，補作・偽作等で名が挙げられることの多い団水浮世草子の文章と西鶴の文章との比較分析を行った．比較分析に用いた西鶴浮世草子は，処女作『好色一代男』と初期に描かれた『諸艶大鑑』『好色五人女』『好色一代女』の4作品で，この4作品は他の人物の手が加わった可能性が低いとされているため，西鶴の文章と捉えることとした．品詞の構成比・単語の出現率・品詞別単語（名詞・助詞・動詞・助動詞・形容詞・副詞・連体詞）の出現率・bigramの出現率（品詞・助詞・助動詞）を用いて，初期の西鶴浮世草子4作品の文章と団水浮世草子3作品の文章を比較し，西鶴と団水の文章に違いがあるかを検討し

た．巻単位で主成分分析を 47 回行った結果では，初期の西鶴浮世草子と団水浮世草子の文章には，単語の出現率・品詞別単語（名詞・助詞・動詞・形容詞・副詞・連体詞）の出現率・bigram の出現率（品詞・助詞）に，違いが見られるということが明らかとなったので，第 6 章 2 節では上記の項目を用い，遺稿集 5 作品『西鶴置土産』『西鶴織留』『西鶴俗つれづれ』『万の文反古』『西鶴名残の友』の各々の文章が，初期の西鶴浮世草子 4 作品と団水浮世草子 3 作品のどちらの文章と類似しているかを主成分分析とクラスター分析を用いて詳細に検討した．

表 1.　47 回の主成分分析の結果

西鶴遺稿集	初期の西鶴浮世草子と類似した特徴の文章を持つ巻	団水浮世草子と類似した特徴の文章を持つ巻	初期の西鶴浮世草子と団水浮世草子の文章とは異なった特徴を持つ巻
『西鶴置土産』	巻 1，巻 2，巻 3，巻 4，巻 5	なし	なし
『西鶴織留』	巻 2，巻 4，巻 5，巻 6	なし	巻 1，巻 3
『西鶴俗つれづれ』	巻 2，巻 3，巻 4，巻 5	巻 1	なし
『万の文反古』	なし	なし	巻 1，巻 2，巻 3，巻 4，巻 5
『西鶴名残の友』	巻 2，巻 3，巻 4	なし	巻 1，巻 5

分析項目を変えて行った計 47 回の巻単位での主成分分析の結果（表 1）をみていくと，初期の西鶴浮世草子と文章の特徴が類似していたのは，『西鶴置土産』の 5 巻，『西鶴織留』の巻 2，巻 4，巻 5，巻 6，『西鶴俗つれづれ』の巻 2，巻 3，巻 4，巻 5，『西鶴名残の友』の巻 2，巻 3，巻 4 であった．団水浮世草子と文章の特徴が類似していたのは，『西鶴俗つれづれ』の巻 1 であった．また初期の西鶴浮世草子 4 作品と団水浮世草子 3 作品のいずれの文章とも異なった特徴を持っていたのは，『西鶴織留』の巻 1，巻 3 と『万の文反古』の 5 巻と『西鶴名残の友』の巻 1 と巻 5 であった．

したがって，数量分析からは西鶴遺稿集 5 作品のなかで，『西鶴置土産』の 5 巻，『西鶴織留』の巻 2，巻 4，巻 5，巻 6，『西鶴俗つれづれ』の巻 2，巻 3，巻 4，巻 5，『西鶴名残の友』の巻 2，巻 3，巻 4 については西鶴作であると考えられるが，『西鶴織留』の巻 1，巻 3 と『西鶴俗つれづれ』の巻 1 と『西鶴名残の友』の巻 1 と巻 5 に関しては別の観点からの検討が必要であるといえる．『万の文反古』の 5 巻については書簡体の影響が考えられるため，再度，第 6 章 3 節で検討することとした．

第6章3節では，初期の西鶴浮世草子とも団水浮世草子とも異なった文章の特徴を示した『万の文反古』に見られた特徴が書簡体形式の影響によるものなのか否かを，西鶴の書簡を用いて検討し，『万の文反古』は浮世草子と書簡の両方の文体の影響を受けているということを明らかにした．

第6章4節では，谷脇（1981）によって提出された『万の文反古』がA系統とB系統の2種類の版下からなるという説について検討し，数量的な分析からは，A系列とB系列の文章の特徴に違いが見いだせないということを明らかにした．

第7章では，本研究での分析の結論を述べた．

なお，付録として以下の分析結果，

1）本論第5章2節で西鶴の浮世草子の文章の特徴について検討した際に，外れ値となった『万の文反古』と『嵐は無常物語』を分析対象から外しての西鶴浮世草子22作品の文章の検討

2）西鶴浮世草子のトピック（好色物・武家物・町人物）において特徴的に用いられている単語の検討

3）本研究の分析に用いた全32作品の作品単位での検討

を記載した．